

2001年12月11日

「日本型産学連携とは？」

小野田武 (三菱化学)

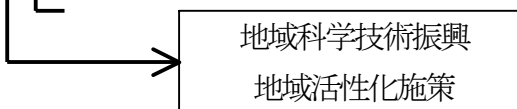
“日本の社会と大学を元気にする産学連携のための制度設計の狙い”

- ・大学の教育研究活動は、システム・プロセス・アウトカム全て不明瞭、かつ、長期的視点と称する施策がなされるのがわが国の常識だったが、産学連携に関しては、狙いとその成果顕在化時期を明確にして取り組むことが肝要。

狙い- 1 [短期的成果とその持続]：「産学の手持ち資産の活用を図る」

内容：“大学の知”と“産業の技”のマッチングを図る

- ・学知 ←→ 産の技 (高い技術力ある) …… 意欲ある中小企業が狙い目
- ・学知 → 産への支援 (技術力?) …… レゾナ機能・TLO 機能 + a 必要
- ・学知 → ベンチャー創出 …… 難題、挑戦



狙い- 2 [中期的成果とその持続]：「狙いを持った有望シーズを仕込む」

内容：“組織的な大学の知”と“組織的な産業の技+ニーズ”のマッチングを図る “

- ・大学改革の重要な目標の一つ
- ・高い専門分野における産学交流の活性化が必須 (ex 学会改革と活用)
- ・学のインセンティブをどう持たせるか? : 組織として、個人として
- ・アカウントビリティと多様な評価の充実 : 学内の、学界内の、社会の

狙い- 3 [長期的成果と若者を惹きつける産学連携の定着]：「人材育成とその流動化」

内容：“世界に通用する科学者・技術者の育成”と“社会の人財としての活用”

- ・世界的基準をクリアした技術者育成 : JABEE の定着
- ・技術者資格 (PE) の普及 : 新技術士制度の定着と国際化
- ・生涯教育、継続職務能力開発システムの確立、普及 : 早急な具体的推進
- ・ダブルメジャー教育の普及 : 大学改革、教育改革
- ・博士後期課程の活性化 (日本の科学技術の弱点) : 大学改革、産業界の意識改革
学生負担の改善 (奨学金)、受け皿の拡大 : RD 企業、インターンシップ等
- ・産学人材交流・流動化 : 制度ギャップの改善、産学両者の勤務、評価体質改革

個の確立、自我の確立、自律・自助、組織依存から組織利用に!